

偶像教との闘いの向こう

2023年3月19日

使徒の働き 19章21～40節

序：19章はパウロのエペソ伝道（第三次伝道旅行の中心の宣教地）
約3年間 使徒 20・31
アジアの宣教の拠点

I. 次の段階

(1)エペソでの伝道が終盤に近づいた（アジア全域に対する中心となる教会設立）

(2)決心＝エペソ ⇒ マケドニア&アカイア ⇒ エルサレム ⇒ ローマ
先に伝道した地域の 異邦人教会からの 宣教のゴール
聖徒たち・教会訪問 義援金を届ける
Iコリ 16・1
ローマ 15・25～

パウロがローマ行きを初めて公言
御霊とパウロ自身の霊によって

(3)自分が行く前にテモテとエラストをマケドニアに派遣
ローマ 16・23 コリントの会衆へ？

II. エペソでの霊的闘い

Iコリ 15・30～32 絶えず危険にさらされ、死を覚悟、獣との闘い

IIコリ 1・8～10 アジアで遭遇した苦難、耐えられない激しい圧迫、絶望
大きな死の危険 死刑の宣告を受けたも同然

大騒動勃発

キリストの福音 VS 女神アルテミス
真の神・創造主 VS 人に作られた偽の神
伝道者・宣教者 VS 銀細工人デメテリオと同業者+扇動された人々

(1)発端

パウロがエペソの守護神アルテミスを神ではないと断言
宣教活動により、エペソの町ばかりかアジア一帯で、人々が福音を聞いて信じた
しかし、実際一番の問題はアルテミス神殿の模型を参拝者に売って多くの収入を
得ていたのに、邪魔され、金儲けができなくなること。
生計に係わる切実な問題ゆえの殺気だった危機感

(2)銀細工人デメテリオ

まず、同業者を集めて説得
自分たちの商売を邪魔するパウロへの敵意
” 評判の悪化、収入の減少、偉大な女神の威光が地に落ちることの恐れ

(3)職人や同業者

激怒、女神アルテミスを賛美、敵対の叫び ⇒ 町中が大混乱、暴徒化
パウロの同行者二人（ガイオとアリストアルコ）を捕らえ、劇場になだれこむ
市民の集会場

(4)パウロ

騒動の群衆の中に入って行こうとした

弟子たちが引き止めた

アジア州の高官であったパウロの友人たちも使いを送って入らないよう懇願

(5)混乱はエスカレート

集まった人々は何のために集まったのか分からない cf. 学生運動

反キリスト教 ⇒ 反ユダヤ人

ユダヤ人たちは形勢が不利に傾きそうなのを見てとって、アレクサンドロを前面に押し出した（この騒動がユダヤ人とは無関係だと説明するため）

弁明しようとした彼に対抗して、エペソ人の神アルテミスは偉大だと叫び続けた（2時間）

(6)騒ぎを収束させた町の書記官

強い権限・地位

異常な興奮状態 ⇒ 暴動（悪化）を防ぐため、事態を鎮静

①エペソの町はアルテミスの守護者（周知の事実だから、軽卒な行動は自重）

②連れて来られたガイオとアリストアルコは無罪

∴ 神殿を汚していない

女神を冒瀆していない

③訴えるなら正当な手順を踏むことを勧告

裁判が行われる日に告訴せよ（地方総督も臨席）

定例議会に議題にとりあげて、議論し決定してもらう

④この混乱状態をローマ政府は看過しない ⇒ 騒乱罪に問われるおそれあり

⑤その場合、書記官たちはこの騒動を弁護する正当な理由がない＝弁護しない

⑥騒ぎを鎮め、集まりを解散させた

Ⅲ. 結び

(1)この書記官はなぜ絶妙な采配ができたか？

①自分の権限と地位を十分に用いて解決に導けるという確信を持っていた

②事件のそもそもの本質は、教理や宗教的なものではなく、銀細工人たちの生活が成り立たなくなるという経済的な問題であると看破していた

③ユダヤ人だから、キリスト信者だからという偏見なしに公平に扱った

④キリスト教、宣教者たちに好意的

(2)パウロの行動&姿勢に学ぶこと

①伝道には危険や困難が伴った、死と隣合わせであった

そのような中で、パウロを支えたのは、信仰に基づく忍耐と使命

②困難と危険の中で、福音の進展のゴールであるローマを見据えていた

③ローマ行きを決心したのは御霊の導き（御霊に支配されている彼の霊）による
出処進退を決するのは御霊と信仰者の霊である